九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

フォークナーの『ミシシッピ詩集』（全詩翻訳）

原口，遼

https://doi.org/10.15017/2332576

出版情報：文學研究. 89, pp.163-185, 1992-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

フォークナーの『ミシシッピ詩集』

（全詩翻訳）

原　口　　遼

解　題

［『ミシシッピ詩集』とは］いきなり翻訳だけを掲げてもぶっきらぼうなので最小限の事を記しておく。本詩集の形式・内容および既存の邦訳に関しては，他の所にかなり詳しく，また辛口の批評を書いた事があるので，興味のある向きはそちらの方を参照されよ（『九大英文学』No. 34 九州大学大学院英語学・英文学研究会 1991年12月）。

さて，William Faulkner（1897-1962）は本格的な小説家になる前，盛んに詩作活動をしていたのであるが，20代の頃にはそうした詩を手書きやタイプライターで打ったりして小冊子の形に纏めて，極く親しい人たちにいわば一種の私家版としてプレゼントしていた様である。

この *Mississippi Poems*（以下『ミシシッピ詩集』と呼ぶ）もそのようにして，1924年の暮，小学校時代のかつての同級生 Myrtle Ramey にプレゼントされたものであって12編の詩が収められている。恐らくその時，フォークナーは今まさにボストンの出版社（The Four Seas Press）から手元に到着した，出版されたばかりの自らの処女詩集『大理石の牧神』（*The Marble Faun*）の現物を手にして，心踊り，その快挙を昔馴染みのマートルに知らせたかったのであろう。その際その処女詩集と一緒に手渡されたのが，タイプで打ち，薄緑色の表紙で閉じた本詩集だった。

いずれにせよ，マートルは半世紀以上もその冊子を後生大事に保存していて，

それはその後，フォークナー資料の蒐集家であるLouis Daniel Brodsky氏の手に渡り，結局，古参のフォークナー研究家であるBlotner教授とCollins教授の手によって公刊されたのである。

［各詩の形式面と全体の並べ方］ まず本詩集の形式面の事について簡単に述べておくと，Nos. 1－7の詩には，順次，ローマン数字でⅠ－Ⅶの番号が付されているが，Nos. 8－12までの詩には番号が付されていない。また，Nos. 3, 4, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12の9詩には表題がつけられているがNos. 1, 2, 5の3詩は無題である等々，形式上の不統一が見られる。これも本詩集が手作りの冊子であったという事から説明がつけられるであろう。

［構造と主題］ 本詩集はその即興的な纏め方のためか，特に一貫したテーマは見つけ難い。しかし今，大摑みにその特徴を述べてみれば，それは恐らく次の様になるであろう。

①春夏秋冬の季節の変化，特にその隆盛と凋落の側面を歌いながら，四季の一巡を以て詩集にゆるやかな形ながら，一つの円環的構造を与えるような構成になっている。

②詩集のタイトルが示すように，フォークナーの故郷のミシシッピの土地への愛着・愛情というものが強く感じられる。

③太陽，月，星，山河，渓谷というものが歌われていて，それらが詩人の心象風景を表わす形で詩が歌われている。

④主調音としては，孤独感，憂愁，離別の感情がdominantなものとして感じられる。

⑤いつかは故郷のミシシッピの土地と訣別し，もっと広い世界に出て身を立てるのだといった若者らしい野心と同時に，自分の将来に対する不安感も表わされている。

⑥中にはNo. 5の詩のように，自分の土地を黙々と耕し続け，地道に生き抜いて行く農夫の事を描写した詩のように，フォークナー後年の小説世界の一面を彷彿とさせる詩もある。

⑦自分の一生を既に透視し，自分の身がいかに変わっても故郷の事を忘れまいぞとする，覚悟が感じられる。

本詩集は，季節の変化，その隆盛と凋落の側面が擬人法等で表わされたりしているが，そこに特に詩人自身のパースナルな喪失感や，堪えられぬほどの悲しみといったものは感じらない。むしろいわば当時の詩作のコンヴェンションに乗っかりながら，時の移ろいへのそこばくの感懐を一種 Housman 的な情調で歌ってみた習作と考えられる。

しかし，この『ミシシッピ詩集』を初期の詩作活動と，その後に来る小説群とを結ぶ鎖の一つの環として捉えてみると，後年の小説の発想法の原型や方法論等が，既に萌芽的かつ多彩な形で窺えると言う点では，熟読玩味に値するであろう。また，私などの様なフォークナー研究家には，人間としても作家としてもまだ本当の意味での厚い壁にぶっかっていない頃の，自由で，孤独で，そして漠とした世界を前にして不安げにたたずむ文学志望の頃の若きフォークナーの生（き）な感情が窺えてなかなかに楽しい読み物である。

『ミシシッピ詩集』（全詩翻訳）

底本としてはCarvel Collins and Joseph Blotner (eds), *Helen: A Courtship and Mississippi Poems* (Tulane University and Yoknapatawpha Press, 1981) を使用。すべて拙訳である。本書は入手し難いので，研究者の便を計って原詩を末尾に付しておいた。

邦訳については，森田孟訳（「William Faulkner の詩」『文芸言語研究：文芸篇』No. 13 筑波大学 1987年）および平石貴樹訳（『フォークナー全集』 I 富山房 1990年）が手にはいる。

[1]　　I.

ぼくが年老いたとき，この木のことを思い出すだろうか。
この丘のことを，またこの谷間が太陽に満ち溢れていたことを。
金色の朝が売られ，緑なす午後が買われ，
それもまた日の終わりには，寝につくために売られて行ったことを。

葡萄酒に聞いても無駄なこと。葡萄が熱く熟したとき
いかなる葡萄にして紫色した太陽を蒸溜することができたのか，と。
無論ぼくに尋ねても無駄なこと。心が久しく忘れてしまった後にも，
両手の記憶がいかなる身体を形どり，今もなおぼくの胸を悩ますのか，と。

声を潜めた風は羽根の翼に乗って空中高く舞い上がり，
樹々の梢をおぼろげにはかなく形どり，
昔日の谷や丘はもはや存在してもいないのに，
ぼくの胸をその思いで永遠に揺すぶる。

だがぼくに銀で鋳た新月を捕まえさせてくれ，
そして美の午後に飼い葉を与えられ，ギリシアから旋風のごとく馳せ参じた

風神ケンタウロスに銀の馬勒を噛まさせよ，
そして，懐かしくも冷たい世の悲しみの上に騎り出させてくれ。

[2]　　Ⅱ.

死の月よ，輝く絶望の月よ。
銀色の海中深く，大地は溺れ，
立ち木は，死んだ女の漂える髪の如く，
くぐもった音の如く水面（みなも）を捜し求める。

幾度か，ぼくはこの絶望ゆえに目を醒まし，
わが脇腹の血の流れる傷口に触ってみたことだろうか。
あたかもぼくが「時」と入れ替わって，
「時」が磔刑になったところの「時」自身の冷やかな場所を占めたかのように。

「時」はそこに横たわっていてくれるだろうか。
ぼくが若く，永遠の死を求めるかのように，その両腿の中で焦がれ，
まばゆい恍惚を求めて，わが身体を傍らに置いたその場所に。
それとも「時」はぼくの唇がかつてとろけた，かの女の唇をもからからに
　吸ってしまうのだろうか。

万象の遺産相続人たる「時」よ，ぼくに記憶だけは残してくれ。
それというのも，傷心とてもたちまちのうちに忘却されるのだから。
ああ，母なる大地よ，優しくせよ。ぼくたちに至福の歓びを与える者はまた，
鳥なく月もない闇夜をも与えることができるのだから。

[3]　　Ⅲ.

インディアン・サマー

遊女は死んだ，幾多の手練手管にもかかわらず。
呪縛力も今はほどけ，脆くわびしい病葉となってしまった。

遊女が最後に長々と振り返ったのは嘆息してくれるのは誰かを見届けるため，
振り返った凝視のまなこに迫り来る宵闇のことを。

遊女が死に，冬のか細く澄んだ雨が遊女の部屋を掃き出し，
男どもの歓楽と苦悩とを待ち受ける今，
新手の遊女がきっとまた羽振りを利かすことだろう。古くて新しい花輪で
男どもの欲望を満たし，その頭を飾ろうとて。

かくてまた，世界は寒さと死に向い，
つばめは青くまどろむ日々の間に姿を消し，
か細く澄んだ雨が吐息つく「夏」のまぼろしをすら追い払う....
幾多の手練手管も及ばず，ついに死んでしまった遊女よ。

やがて春はめぐり来る！　だから歓ぶことさ！　だが古い悲しみは
依然としてつんと消え残る，空中に漂う燃え木の煙のごとくに。

[4]　Ⅳ.

雁

世界の縁辺（へり）を越え，渋々と従う温和な十一月を，
はたまた寒冷の月々を引きずりながら...
淋しい雁どもの声は一体何を震わせるのか。
私がわが肉体を得る前のこの塵を思い出させようとて。

一千年もの間平穏の眠りをむさぼりながら，何という落ちつかぬ老いた夢が，
いま私の血を鋭い不安へと目覚めさせるのか。いかなる角笛が雁に呼びかけるのか，
私が生を受ける前，私は荒涼とした淋しい空を
さっと飛び行く雁のように自由だっただろうか。

私の身体を形造り，私に視力を与えてくれたこの神の手が，

私が呼吸する代償として，私を土くれの奴隷にしたのだ。
ああ野性にして孤独なる者よ，一気に翔び行くのだ！
我には嘲弄があり，汝には華麗にして疾風の如き潔い死がある。

世界の縁辺（へり）を越え，輝かしい昼より飛びたち，
偉大な望みを求めつつ，しかも空しからざる者たちよ！
雁たちの列は，赤く瀕死の月影を満たしそして姿を消す。
鳴きながら，雁はまた世界の縁辺（へり）を横切って渡り行く。

[5]　V.

男が褐色の土地を耕している。さらに甘美なことには
うねの影を引きずるかのようにして，
風が，ひそやかにさあっと通り過ぎる。
男の足元ではうねが掘り起こされ，うねの終わりに来ると

男は向きを変える。頭の回りには平安があり，
男は再び土地を横切って行く，自分自身の土地を。
そこには依然として糧食への大きな約束があり，
彼の回りには力溢れる芳香が清く漂っている。

つやつやと輝く青い森から，
黒鳥がすずやかに芳醇な笛を吹く。
そこへ到ると，彼は暫く立ち止まり，
自分の肺一杯に息を吸い込む。と，黄色く筋を引いて

兎が飛び出して来たが，それは恐怖に悶えて，
飛んでいく黄金色のものは筋肉を張って，
あっちこっちに飛び跳ねながら大地を横切って行った。
男は叫ぶ。液体の揺れるかのような黒い松の影が，

男の遠く低くなる声を映す。丁度，木の葉が落ちていく自分に合わせて，
冷たく澄んだ深みを持ち上げるかのように。
それから再び，白光りするペルフの中の，　　(ペルフは未詳)
沈黙の泥棒たる黒鳥が，

空(そら)の白い頁の上に，
自分の生命(いのち)への答えを記すが，
それは，通りすがりの者がもし読み取れたなら，
人間の奮闘・努力への憤怒すべき空虚さ。

男は再び羊の鈴の音に調子を合わせて動き始める，
緑の山の上に漂う雲のようにゆっくりと。
淡い葉をした柳の木の簾の向こうでは，どこかで
さらさらと音を立てながら川が眠りこけている。

風と太陽と眠りと。男は根が純朴なだけに，
一層甘美に褐色の大地を耕すことに専心できる。
何と言っても，男はここで自らの手足で，
自分の生命の糧食をかち得ることができるのだから。

[6]　　Ⅵ.

詩人盲目になる

わが人生がその真昼にも達しない前，
そんなにもあっけなく闇夜によって切断してしまったお前よ。
これは何たる冗談なのか。寝ている者を起こし，
頼みもしないのに人生の日中に連れ出し，その上
折角目覚めた時間を今度は取り上げ，太陽も月も奪ってしまうとは。

暗闇が永遠に落ちる前の，

人生七十年だって山河のことを学ぶには短かすぎるというのに。
だからもはや見ることがかなわないのなら，
黄昏時や明け方に七変化する山河のことを
何一つ忘れないよう心に焼き付けるだけの時をくれ。

風は世界から吹き来たり，我が眼に見えぬ丘を隅取り，
私の頬に当たるので，私は絶望する。
お前は強い。だがお前の強力（ごうりき）を用うべき憎悪と恐怖とは他所にあるはず。
ああ，探し求めるために，両眼を残せ。
わが心を金色の部屋の空中ではばたかせよ。

お前よ，塵からまた紅蓮の苦痛の根から，
葉と蕾と成木にまで私を育んでくれた者よ。
私の両眼を奪わないでくれ！　たとえ私の手足は奪い，
舌をも奪い，聴力をも奪いたければそれもよし。命すら差し出そう。
だが，かの黄金色に輝く世界だけは返してくれ。

[7]　　Ⅶ.

わが墓碑銘――ミシシッピの丘

私が愉しく遊んだ遥かな青い丘では，
「恋人よ！」と鳴くツグミの声を追い掛けるかのように，
銀色の足した春が，みずきの花蔭を歌を歌いつつ訪れる。
私が辿り来たった道程（みちのり）の終わりが見えて来るときに。

天からの貰い水を受けるに相応しい形をした私の柔らかいこの口を，
悲しみゆえにまさしく金色の悲しみとせよ。
緑なす森にはここで夢みさせておけ，
そして私が再び故郷に戻るとき，私の胸中に目覚めさせるのだ。

きっと故郷に帰るとも！　わが頭上にまどろむ青い丘のその土の中に，
私がしかと根づく以上，どこに死などがあるだろう。
たとえ私が死んだとて，私をしかと抱き締める大地には
私が息づいていることがきっと分かるはず。

老いた樹は黄金の過ぎた年月（としつき）を嘆こうにも，緑の若葉を持っていない。
私たちは輝く年月を使いながら，ついには後悔を買ってしまう。
ならば，私にして，もしわが眠りを揺すぶり破る
春の再訪のことを忘れるならば，私はまさしく呪われよ。

[8]　十二月――エリーズへ

ぼくたちがともに知っていた春は，どこへ飛んで行ったのだろうか。
去年（こぞ）の枝もすっかり枯れ果てた。
けれどぼくは君の手がいつか冬空を捉まえ，
雨を撫でつけ，空を晴れやかにしたのを見た。

春が往くとき，「眠りの木」から，
これらの褐色で哀れな葉が，また後悔が溺れて消えてしまうのなら，
ぼくの胸中の滴り嘆くかのような毎日も
もはやわびしくつらい年月となることもないであろう。

私の心の冬にあって，君は芽吹く樹だった。
そして春は遅れてやって来ただけに一層甘美だった。
君よ，荒れたわびしい庭に
春を運んで来てくれた風なる君よ。

君はすべて春そのものだった。そして五月，六月は
君がそこにいればこそさらに緑に輝いた。
だが今はどんよりとして雨の季節で，太陽も月も死に果て，
世界中が闇。　ああ，美しかった君よ。

[9] 三月

林檎の木の下で，イヴの悶える姿態が
蛇の形の中で白く輝いた。イヴの割けた胸は，
蛇に斜(はす)にとぐろを絡まさせながら，消え行く太陽のことを
黒い罪の東西への予兆と見做す。

冬の夜通し，男は自らが犯した
古い罪の許しで，暖(だん)を取ることができる。
「血の船」たる肉体を呪物として用い，
生れながらにして，自らが罪なるものを受け継いでいる事を忘れながら。

だが，古き神々は瓦解し――代わっていにしえの蛇が
王位を受け継ぎ，冠を戴き，その寵臣には
人間の渇きを決して癒すことなく，却って欲望の火屑を養い煽り立てる
金の林檎を侍らせる――千鳥や鷲や
甲高い声を上げながら北方へ渡る鳥たちが，
ナザレ人(びと)やローマ人(じん)やヴァージニアの人々の頭上を天駆けるときに。

[10] 十一月十一日

日は暗く，あたかも年中寒かったかのよう。
虚ろな大地を横切っていくつばめの鳴き声は，
春が南方へ飛び去ったことを印している。
空に転げているのはただ冬景色のみ。

ああ哀れな大地よ！このわびしく苦(にが)い眠りが，
身じろぎし寝返りを打つとき，時はまたもや緑の季節を迎え，
おちこちの虚ろな小径にも草々が這うことだろう。
それを踏みしだく者とてなけれど。

四月，五月，六月が来ても，情熱が枯れ果てた故，
傷つこうにも目覚めようにも，緑で萌え立たせることができない。
暗い十一月の大地よ，芽吹いて何になる。
緑の季節を迎えんとてお前の眠りを破る必要とてないだろうに。

枯れ木の間に声を潜めた風の嘆きが
ここかしこの小径の草を震わせ，
かくて「悲しみ」と「時」とは変わらざる金色(こんじき)の海――
静まれ，静まれ！　彼が故郷に帰りたれば。

[11]　絞首台

母は言った。私はこの子を
かつてない若者にしてみせるわ。
（言いながら，わが子をひしと抱いてあやし，
金色に艶々と輝く柔らかい髪の毛を撫でた。）
この子の輝く青春は，練金術師すら
ついぞ見たことがない貴金属となるだろう。

母は言った。私はこの子に
輝く大志を持たせよう。
人の世の浮き滓もこの子の灼熱の火に
燃え尽きさせられて清浄になるだろうさ。
この子は逞しく元気に育つだろう，
そして清廉な勇者となるだろう。
世界中の人たちが，この子が暗いお墓の中に横たわるとき，
きっと嘆き悲しむ事だろうさ。

でも，暗いお墓はこの子を優しく迎えてくれるだろう，
世界中のどんな人間なんかよりも優しく。
（わびしい風が奴の身体をあやし，

――今や奴にはあらゆる事がどうでもよくなっていたわけだが――
驕慢な星の光がひっそりと
奴の金髪を撫でるばかり。）

[12]

身籠もり

古代の音楽の密やかな下がり調子に合わせるかのように，
女の種子は濃密な暗がりの中で熱く湿っていた。
そして，冷たい三つ星が壁に刻み込まれた。
雨と火と死とが女の戸口の上に据え付けられたのだ。

女の両手は盲いてしなやかな火のごとく胸の上で呻き，
女のほこらの中が明るんだ。女は自分の苛まれた身体が
奇妙な苦(にが)い七絃琴の音色に合わせてよじられるが分かったが，
その音楽とはかつては素朴に結ぼれた清らかな弦だったのだ。

女の浅くも幸せそうな悲しみが
一度(ひとたび)夢現の臆病さのうちに結婚するや，
昨日(きのう)までの単純無垢な歌を，
明日のいかなる音楽が償い取るのか。

冬の眠りが，一雨来て新緑に目覚めるごとく，
女が目醒めたとき胸の上に三つ星がある。
そして土中のほこらでは，春の予感が震えている。
丁度，女の腰の中で耕され受精された穀粒の種子のごとくに。

MISSISSIPPI POEMS（原詩）

[1] I.

Shall I recall this tree, when I am old,
This hill, or how this valley fills with sun
And green afternoon is bought for morning's gold
And so again for sleep when day is done?

As well to ask the wine to say what grapes
Distilled their purple suns when full and hot,
Or me what body hands' remembering shapes
To trouble heart when mind has long forgot.

The hushèd wings of wind are feathered high
And shape the tree-tops, vaguely fugitive,
To shake my heart with hill and vale for aye
When vale and hill itself no longer live.

But let me take this silver-minted moon
And bridle me the wind centaurs that whirled
Out of Hellas, grained at beauty's noon,
And ride the cold old sorrow of the world.

[2] II.

Moon of death, moon of bright despair:
Deep in a silver sea the earth is drowned
And the trees her dead and restless hair
Seeking the surface like a troubled sound.

How oft to this despair must I awake
To feel a bleeding wound within my side
As though with Time I had exchanged, to take
His own cold place where He is crucified.

Shall Time lie here, where I was young and lay
This body by for bright heart's ravishment,
Craved in these thighs where I sought death for aye?
Shall Time suck dry the mouth where mine was blent?

Time, the heir to all, might leave me this
Since the heart-break is so soon forgot:
O mother earth, be kind: who gave us bliss
Can give a night where moon and bird are not.

[3]

Ⅲ.
INDIAN SUMMER.

The courtesan is dead, for all her subtle ways,
Her bonds are loosed in brittle and bitter leaves,
Her last long backward look's to see who grieves
The imminent night toward her reverted gaze.

Another will reign supreme, now she is dead
And winter's lean clean rain sweeps out her room,
For man's delight and anguish: with old new bloom
Crowning his desire, garlanding his head.

So, too, the world, turning to cold and death
When swallows empty the blue and drowsy days
And clean rain scatters the ghost of Summer's breath--

The courtesan that's dead, for all her subtle ways--

Spring will come! Rejoice! But still is there
An old sorrow sharp as wood-smoke on the air.

[4] IV.

WILD GEESE.

Over the world's rim, drawing bland November
Reluctant behind them, drawing the moons of cold;
What their lonely voices stir to remember
This dust ere it was flesh? what restless old

Dream a thousand years was safely sleeping,
Wakes my blood to sharp unease? what horn
Rings out to them? Was I free once, sweeping
Their wild and lonely skies ere I was born?

This hand that shaped my body, that gave me vision,
Made me a slave to clay for a fee of breath.
Sweep on, O wild and lonely! Mine the derision,
Thine the splendor and speed, the cleanness, of death.

Over the world's rim, out of some splendid noon,
Seeking some high desire, and not in vain!
They fill and empty the red and dying moon
And crying, cross the rim of the world again.

[5] V.

He furrows the brown earth, doubly sweet
To a hushed great passage of wind

Dragging its shadow. Beneath his feet
The furrow breaks, and at its end

He turns. With peace about his head
Traverses he again the earth: his own,
Still with enormous promises of bread
And clean its odorous strengh about him blown.

From the shimmering azure of the wood
A blackbird whistles, cool and mellow;
And here, where for a space he stood
To fill his lungs, a spurting yellow

Rabibit bursts, its hurtling gold
Muscled to erratic lines
Of fluid fear across the mold.
He shouts. The darkly liquid pines

Mirror his falling voice as leaf
Raises clear cool depths to meet its falling self;
And then again the blackbird, thief
Of silence in a glossy pelf,

Inscribes the answer to its life
Upon the white page of the sky:
The furious emptiness of strife
For him to read who passes by.

He moves again, to bells of sheep
Slow as clouds on hills of green;

Somewhere rumorous waters sleep
Beyond a faint-leaved willow screen.

Wind and sun and sleep: he can
Furrow the brown earth, doubly sweet
To a simple heart, for here a man
Might bread him with his hands and feet.

[6]

VI.

THE POET GOES BLIND.

You, who so soon with night would break
My day in half, before it reached its noon:
What sport is this — the sleeper to awake
Into a day he sought not, then to take
His waking span and rieve its sun and moon?

Three score and ten were short enough for learning--
Before the dark descends for aye on me--
These streams and hills, so give me time for burning
Upon my heart their eve- and dawnward-turning
Past all forgetting, if I must not see.

The wind blows from the world, upon my cheek,
Molding unseen hills, and I despair.
You are strong: there's hate and fear to wreak
Your might upon! O leave me eyes to seek,
To wing my heart through golden-chambered air.

You, who to leaf and bud and tree,
Raised me from dust and crimson roots of pain,

Take not mine eyes! take limbs; let me be
Tongueless, dead to sound: take breath from me
Or give me back my golden world again.

[7] Ⅶ.

MISSISSIPPI HILLS : MY EPITAPH.

Far blue hills, where I have pleasured me,
Where on silver feet in dogwood cover
Spring follows, singing close the blue bird's "Lover!"
When to the road I trod an end I see.

Let this soft mouth, shaped to the rain,
Be but golden grief for grieving's sake,
And these green woods be dreaming here to wake
Within my heart when I return again.

Return I will! Where is there the death
While in these blue hills slumbrous overhead
I'm rooted like a tree? Though I be dead
This soil that holds me fast will find me breath.

The stricken tree has no young green to weep
The golden years we spend to buy regret.
So let this be my doom, if I forget
That there's still spring to shake and break my sleep.

[8] DECEMBER :

TO ELISE.

When has flown the spring we knew together?

Barren are the boughs of yesteryear;
But I have seen your hands take wintry weather
And smoothe the rain from it, and leave it fair.

If from sleep's tree these brown and sorry leaves,
If but regret could drown when springs depart,
No more would be each day that drips and grieves
A bare and bitter year within my heart.

In my heart's winter you were budding tree,
And spring seemed all the sweeter, being late;
You the wind that brought the spring to be
Within a garden that was desolate.

You were all the spring, and May and June
Greened brighter in your flesh, but now is dull
The year with rain, and dead the sun and moon,
And all the world is dark, O beautiful.

[9] MARCH

Beneath the apple tree Eve's tortured shape
Glittered in the snake's, her riven breast
Sloped his coils and took the sun's escape
To augur black her sin from east to west.

Through winter's night man can take for warm
Forgiveness of old sins he did commit,
With fetiches the ship of blood to charm,
Forgetting that, with birth, he's heir to it.

But old gods fall away --the ancient Snake
Is throned and crowned instead, who has for minion
That golden apple which will never slake
But feeds and fans man's crumb of fire--when plover
And eagle and shrill northing birds whip over
Nazarine and Roman and Virginian.

[10] NOVEMBER 11 TH

Gray the day, and all the year is cold,
Across the empty land the swallows' cry
Marks the south-flown spring: naught is bowled
Save winter, in the sky.

O sorry earth, whe n this bleak bitter sleep
Stirs and turns, and time once more is green,
In empty path and lane grass will creep,
With none to tread it clean.

April and May and June, and all the dearth
Of heart to green it for, to hurt and wake;
What good is budding, gray November earth,
No need to break your sleep for greening's sake

The hushed plaint of wind in stricken trees
Shivers the grass in path and lane
And Grief and Time are tideless golden seas--
Hush, hush! he's home again.

[11] THE GALLOWS.

His mother said: I'll make him
A lad as ne'er has been
(And rocked him closely, stroking
His soft hair's golden sheen)
His bright youth will be metal
No alchemist has seen.

His mother said: I'll give him
A bright and high desire
'Till all the dross of living
Burns clean within his fire.
He'll be strong and merry
And he'll be clean and brave,
And all the world will rue it
When he is dark in grave.

But dark will treat him kinder
Than man would anywhere
(With barren winds to rock him
--Though now he doesn't care--
And hushed and haughty starlight
To stroke his golden hair)

[12] PREGNACY

As to an ancient music's hidden fall
Her seed in the huddled dark was warm and wet,
And three cold stars were riven in the wall:
Rain and fire and death above her door were set.

Her hands moaned on her breast in blind and supple fire,
Made light within her cave: she saw her harried
Body wrung to a strange and bitter lyre,
Whose music once was pure stings simply married.

One to another in sleepy diffidence
Her thin and happy sorrows once were wed,
And what tomorrow's chords be recompense
For yesterday's single song unravished?

Three stars in her heart when she awakes
As winter's sleep breaks greening in the rain,
And in the caverned earth spring's rumor shakes,
As in her loins, the tilled and quickened grain.